

フンシャル移住地の紹介

平成 23 年度派遣
日系社会青年ボランティア
職種：バドミントン
氏名：齊藤 晋

餅つきと忘年会

昨年 12 月 17 日、フンシャルという移住地で、同移住地主催の餅つきと忘年会が開催され、領事館、リオ州日伯文化体育連盟、商工会議所、日本人学校、それぞれの関係者とその家族を含め、100 人を超える参加者があった。

昨年は例年より多い 110kg のもち米が用意され、3 組の臼と杵、参加者ほぼ全員に加え移住者の家庭で働く現地人労働者の力も借りたが、4 時間もかかる餅つきとなった。その場で食べるだけでなく、持ち帰り用、また、餅つきの後の忘年会にはお雑煮としても振舞われた。臼と杵を用いて餅をつくことは、正月を代表する日本の伝統的な行事であるものの、今では特別な行事でもなければ日本でも見ることのない光景であり、今回の餅つきを通じて、杵の重さ、餅をつくことの大変さ、ひいては先人の苦労を体験することができた。またお雑煮の味はというと、北海道と九州の出身者が多い移住地ということもあり、日本のどこにも属さない味となっている。

この餅つきは、20 年以上続く年末の恒例行事になっており、「この餅つきをしなければ年を越せない」という参加者もあった。



説明：餅をつく現地人労働者と餅を返すリオ州日本人学校校長、時折アドバイスを入れる移住者の妻たち。2011年12月17日撮影。



説明：餅つき後の忘年会の様子。ついた餅で作ったお雑煮の他に、参加者や移住者の女性陣が腕を振るった一品料理も振舞われた。2011年12月17日撮影。

フンシャル移住地の歴史

フンシャルはリオデジャネイロ市中心部の北東約 110km に位置し、1,015ha の広さを持ち、リオデジャネイロ州では唯一の日本海外移住振興会社（後の海外移住事業団、JICA：独立行政法人国協力機構の前身となる海外技術協力事業団と 1963 年に合併）の直轄移住地として 1961 年から入植が開始された。1961 年 4 月に第一陣 4 家族が到着、同年 9 月までに 42 家族が入植し、1963 年までにさらに 6 家族が入植、計 48 家族となった。移住者の前職は北海道と九州の炭鉱離職者が 50% を占め、教師や技術者、商業などが 40%、農業事業者は 10% しかいなかった。

またフンシャルは、天皇陛下が皇太子当時に訪れた土地でもある。資料によると、ブラジルに国賓として招かれた皇太子殿下は、1967 年 5 月 26 日にリオを訪れ、翌 27 日 6 時半から 8 時 20 分までフンシャル移住地に滞在、移住地の視察を行うとともに、移住者と大いに交歓を持たれたという。また同資料には、ブラジル日系社会において、天皇陛下もしくは皇太子殿下が「直接訪問された例は、このフンシャルより他はない。」とも記されている。

フンシャルは昨年で入植 50 周年を迎えた。記念式典を予定していたが昨年 3 月の東日本大震災を受け、式典を自粛すると同時に、式典開催の為に集めていた資金 15,000 レアル（日本円で約 60 万円）を全額復興支援へと寄付したという。



ブラジル、リオデジャネイロ州地図。フンシャルは、リオ市中心部の北東約 110km に位置する。

出典：三十年史刊行委員会、『あけぼのーリオ・デ・ジャネイロ州日伯文化体育連盟三十年史』より転載



説明：当時皇太子殿下の御来訪を記念して建立された記念碑。餅つきと忘年会、その他の行事の際に使用される会館の傍にある。2011年9月4日撮影。

秋田と所縁のあるフンシャル移住者

古木 三右衛門（ふるき・さんえもん）氏

1933年（昭和8年）生まれ。秋田市上新城出身。22歳の時に移住事業とは別にブラジルに移り住む。フンシャルでの移住事業が始まる数年前から同地で生活を始める。養鶏に始まり、4万羽の鶏、牛や豚の飼育、ココ椰子の栽培を行う。妻・百合子（ゆりこ）さんは、福岡県出身、北九州の炭鉱離職者の娘として、1961年の第一陣入植者としてフンシャルに移り住む。



説明：古木氏ご夫妻。2011年10月23日撮影

小松 兼吉（こまつ・かねきち）氏（故人）

1925 年生まれ、2006 年死去。旧平鹿郡大雄村出身。1961 年 8 月にフンシャルに入植。妻・恵美子（えみこ）さんは、樺太出身。戦後、北海道美唄の炭鉱離職者として息子・滋（しげる）さんが 6 歳の時にフンシャルに移住する。現在もグアバの栽培を続けている。



説明：小松氏の妻・恵美子さんと息子・滋さん。2011 年 12 月 18 日撮影。二人の後ろに写る背の低い木がグアバの木。